



く^らも^りに、と^しお^おいたま^まじ^ょがす^んでいま^した。

このま^まじ^ょにの^のいをか^かけら^れたらさい^{さい}ご^ご、
だ^だれもに^に逃げ^にげられ^れないこ^ことをひ^ひと^とび^びと^とし^しは知^しっていま^した。



AliceKan

へそまがりの
魔女まじ

安東みきえ 文
牧野千穂 絵

ある日、ひとりの娘がやってきて、
魔法の家のドアをたたきました。

「たすけてください。道にまよってしまいました」



魔法は娘の話を聞くと、ねずみを放しました。

「このねずみについてお行き。家への道をおしえてくれる」
娘は首を横にふりました。

「ほんとうは帰る家がないのです」

そのころ王国は混乱をきわめていました。

王に世継ぎが生まれないために、

領主たちは戦いにあけくれ、

すてられた子どもが国中にあふれていたのです。

「どうかここにおいでください。どんな仕事もしますから」



しかし、^{まじょ}魔女はドアをとじようとします。

「とにかくそのねずみについてお行き。

^{わる}悪いが、あたしにできるのはそこまでだ」

するとどうしたことでしょう。

ねずみは^{むすめ}娘を見上げ、ついておいでというように、

^{まじょ}魔女の家に入って^{はい}いくではありませんか。

^{むすめ}娘はよごれた^{かお}顔をほころばせました。

「ついていっていいですか」

^{まじょ}魔女はしかめっつらをしながらもドアをひろげました。

こうして^{まじょ}魔女と^{むすめ}娘はいっしょに暮らすようになったのです。



娘はたぎをみつめ、ニワトリの世話をし、
やせた畑をたがやしました。

水をくむ仕事はとくにたいへんでした。

日になんども川と家を往復しなければなりません。

水は重く、肩がひどく痛みましたが、

娘は文句のひとつも言わずによくはたらきました。

しかし魔女の態度はそっけないものでした。



ねずみにかけるやさしいことばの半分も娘にはかけません。

それでも娘は平気でした。

それまでひどい仕打ちをされるのが

当たり前前の暮らしだったので、

やさしさがどんなものか知らなかったのです。